

春先の虫たち

2020.3.14 自然解説員 神谷耀生



キタテハ



ルリタテハ

成虫^{せいちゅう}で冬をこすチョウたち。キタテハの幼虫^{ようちゅう}はカナムグラを、ルリタテハの幼虫はサルトリイバラを食べます。両者ともにはねのうらは枯れ葉そっくりで、冬ごししている間はまわりの風景^{ふうけい}にとけこんで目立ちません。春が近づいてあたたかい日が増^ふえると、日なたを飛び回るようになります。



キバラモクメキリガ

成虫で冬をこすガ。木のえだのかけらにととてもよく似ています。樹液^{じゅえき}や花のみつ、灯^{あか}りなどにやってきます。他のガとちがって、敵^{てき}に見つかると飛んで逃げようとせず、じっとかたまってやり過ごそうとすることがあります。



クビキリギス

成虫で冬をこすキリギリス。冬ごししている間、体の色を茶色く変えることがあります。あごの力が強いがおとなしい性格で、主に植物の葉っぱなどをエサにしています。春になると草むらや生垣(いけがき)の中で「ジー——ッ」と切れかけた電球でんきゅうのような音で鳴きます。耳にしたことがあるかもしれませんね。



カブトムシの幼虫

夏の終わりに産み落とされた卵からかえった幼虫は、腐葉土(ふようど)の中ですくすくと育ち、冬には2回目の脱皮だっぴを終えて大きな終齢幼虫(しゅうれいようちゅう)になっています。このころの幼虫は成虫よりも体が重くなります。5月～6月ごろになるとさなぎになり、夏の森で活動する時を待つのです。

作成：2021年3月 21世紀の森と広場 パークセンター